

老妓抄

岡本かの子

青空文庫

平出園子というのが老妓の本名だが、これは歌舞伎俳優の戸籍名のように当人の感じに
 ならずまいところがある。そうかといつて職業上の名の小そのとだけでは、だんだん素
 人の素朴な気持ちに還ろうとしている今日の彼女の気品にそぐわぬ。

ここではただ何となく老妓といつて置く方がよからうと思う。

人々は真昼の百貨店でよく彼女を見かける。

目立たない洋髪に結び、市樂いちらくの着物を堅気風につけ、小女一人連れて、憂鬱な顔をし
 て店内を歩き廻る。恰幅かつぶくのよい長身に両手をだらりと垂らし、投出して行くような足取
 りで、一つとところを何度も廻り返す。そうかと思うと、紙かみだこ 凧たこの糸のよすつとにして
 行つて、思いがけないような遠い売場に佇むたたず。彼女は真昼の寂しき以外、何も意識してい
 ない。

こつやつて自分を真昼の寂しさに憇いこわしている、そのことさえも意識していない。ひよ
 つと目星めほしい品が視野から彼女を呼び覚すと、彼女の青みがかつた横長の眼がゆつたりと開
 いて、対象の品物を夢のなかの牡丹ぼたんのように眺める。唇が娘時代のように捲まくれ気味に、片
 隅へ寄ると其処に微笑うかが泛ぶ。また憂鬱に返る。

だが、彼女は職業の場所に出て、好敵手が見つかる、はじめはちよつと呆けたような表情をしたあとから、いくらでも快活に喋舌り出す。

新喜樂のまえの女将の生きていた時分に、この女将と彼女と、もう一人新橋のひさごあたりが一つ席に落合つて、雑談でも始めると、この社会人の耳には典型的と思われる、機知と飛躍に富んだ会話が展開された。相当な年配の芸妓たちまで「話し振りを習おう」といって、客を捨てて老女たちの周囲に集つた。

彼女一人のときでも、気に入つた若い同業の女のためには、経験談をよく話した。

何も知らない雛妓時代に、座敷の客と先輩の間に交される露骨な話に笑い過ぎて畳の上に粗相をしてしまい、座が立てなくなつて泣き出してしまったことから始めて、囲いもの時代に、情人と逃げ出して、旦那におふくろを人質にとられた話や、もはや抱妓の二人三人も置くような看板ぬしになつてからも、内実の苦しみは、五円の現金を借りるために、横浜往復十二円の月末払いの俵に乗つて行つたことや、彼女は相手の若い妓たちを笑いでへとへとに疲らせずには措かないまで、話の筋は同じでも、趣向は変えて、その迫り方は彼女に物の怪がつき、われ知らずに魅惑の爪を相手の女に突き立てて行くように見える。若さを嫉妬して、老いが狡猾な方法で巧みに責め苛んでいるようにさえ見える。

若い芸妓たちは、とうとう髪を振り乱して、両脇腹を押え喘いでいうのだった。

「姐さん、頼むからもう止してよ。この上笑わせられたら死んでしまおう」

老妓は、生きてる人のことは決して語らないが、故人で馴染のあつた人については一皮剥いた彼女独特の観察を語った。それ等の人の中には思いがけない素人や芸人もあつた。

中国の名優の梅蘭芳メイランファンが帝国劇場に出演しに来たとき、その肝煎りきもいをした某富豪に向つて、老妓は「費用はいくらかかっても関りませんから、一度のおりをつくつて欲しい」と頼み込んで、その富豪に宥め返されたという話が、嘘か本当か、彼女の逸話の一つになつている。

笑ひ苦しめられた芸妓の一人が、その復讐のつもりもあつて

「姐さんは、そのとき、銀行の通帳を帯揚げから出して、お金ならこれだけありますと、その方に見せたというが、ほんとうですか」と訊く。

すると、彼女は

「ばかばかしい。子供じゃあるまいし、帯揚げのなんのつて……」

こどものようになつて、ぶんぶん怒るのである。その真偽はとにかく、彼女からこういううぶな態度を見たいためにも、若い女たちはしばしば訊いた。

「だがね。おまえさんたち」と小そのは総てを語ったのちにいう、「何人男を代えてもつづまるところ、たった一人の男を求めているに過ぎないのだね。いまこうやって思い出して見て、この男、あの男と部分々に牽かれるものの残っているところは、その求めている男の一部一部の切れはしなのだよ。だから、どれもこれも一人では永くは続かなかつたのさ」

「そして、その求めている男というのは」と若い芸妓たちは訊き返すと

「それがはつきり判れば、苦労なんかしやしないやね」それは初恋の男のようでもあり、また、この先、見つかつて来る男かも知れないのだと、彼女は日常生活の場合の憂鬱な美しさを生地いで出して云つた。

「そこへ行くと、堅気さんの女は羨うらやましいねえ。親がきめてくれる、生涯ひとりの男を持つて、何も迷わずに子供を儲けて、その子供の世話になつて死んで行く」

ここまで聴くと、若い芸妓たちは、姐ねえさんの話もいいがあとが人をくさらしていけないと評するのであつた。

小そのが永年の辛苦で一通りの財産も出来、座敷の勤めも自由な選択が許されるように

なつた十年ほど前から、何となく健康で常識的な生活を望むようになった。芸者屋をしている表店と彼女の住っている裏の蔵附の座敷とは隔離してしまつて、しもたや風の出入口を別に露地から表通りへつけるように造作したのも、その現われの一つであるし、遠縁の子供を貰つて、養女にして女学校へ通させたのもその現われの一つである。彼女の稽古事が新時代的のものや知識のものに移つて行つたのも、或はまたその現われの一つと云えるかも知れない。この物語を書き記す作者のもとへは、下町のある知人の紹介で和歌を学びに来たのであるが、そのとき彼女はこういう意味のことを云つた。

芸者というものは、調法ナイフのようなもので、これと云つて特別によく利きくこともいらないが、大概なことに間に合うものだけは持つていなければならぬ。どうかその程度に教えて頂きたい。この頃は自分の年かっこう好から、自然上品向きのお客さんのお相手をする事が多くなつたから。

作者は一年ほどこの母ほども年上の老女の技能を試みたが、和歌は無い素質ではなかつたが、むしろ俳句に適する性格を持つてるのが判つたので、やがて女流俳人の某女に紹介した。老妓はそれまでの指導の礼だといつて、出入りの職人を作者の家へ寄越して、中庭に下町風の小さな池と噴水を作つてくれた。

彼女が自分の母屋おもやを和洋折衷風に改築して、電化装置にしたのは、彼女が職業先の料亭のそれを見て来て、負けず嫌いからの思い立ちに違いないが、設備して見て、彼女はこの文明の利器が現す働きには、健康的で神秘的なものを感ずるのだった。

水を口から注ぎ込むとたちまち湯になつて栓口から出るギザーや、煙管きせるの先で圧すと、すぐ種火が点じて煙草に燃えつく電気たばこぼん 盆ぼん や、それらを使いながら、彼女の心は新鮮ふるに慄えるのだった。

「まるで生きものだね、ふーム、物事は万事こういかなくっちゃ……」

その感じから想像に生れて来る、端的で速力的な世界は、彼女に自分のして来た生涯を顧みさせた。

「あたしたちのして来たことは、まるで行燈あんどんをつけては消し、消してはつけるようなまどろい生涯だった」

彼女はメートルの費用の嵩かさむものに少なからず辟易へきえきしながら、電気装置をいじるのを楽しみに、しばらくは毎朝こどものように早起した。

電気の仕掛けはよく損じた。近所の蒔田まきたという電気器具商の主人が来て修繕した。彼女はその修繕するところに附纏つきまとつて、珍らしそうに見ているうちに、彼女にいくらかの電

気の知識が撮り入れられた。

「陰の電気と陽の電気が合体すると、そこにいろいろの働きを起して来る。ふーむ、こりや人間の相性とそつくりだねえ」

彼女の文化に対する驚異は一層深くなった。

女だけの家では男手の欲しい出来事がしばしばあった。それで、この方面の支弁も兼ねて蒔田が出入していたが、あるとき、蒔田は一人の青年を伴つて来て、これから電気の方のことはこの男にやらせると云つた。名前は柚木ゆきといった。快活で事もなげな青年で、家の中を見廻しながら「芸者屋にしちやあ、三味線がないなあ」などと云つた。度々来ているうち、その事もなげな様子と、それから人の気先を撥ね返す颯爽さつそうとした若い気分が、いつの間にか老妓の手頃な言葉仇がたきとなつた。

「柚木君の仕事はチャチだね。一週間と保もつた試しはないぜ」彼女はこんな言葉を使うようになった。

「そりやそうさ、こんなつまらない仕事は。パッションが起らないからねえ」

「パッションって何だい」

「パッションかい。ははは、そうさなあ、君たちの社会の言葉でいうなら、うん、そうだ、

「いろいろ気が起らないということだ」

ふと、老妓は自分の生涯に憐あわれみの心が起った。パッションとやらが起らずに、ほとんど生涯勤めて来た座敷の数々、相手の数々が思いうか泛べられた。

「ふむ。そうかい。じゃ、君、どういふ仕事ならいふ気が起るんだい」

青年は発明をして、専売特許を取って、金を儲けることだといった。

「なら、早くそれをやればいいじゃないか」

柚木は老妓の顔を見上げたが

「やればいいじゃないかって、そう事が簡単に……（柚木はここで舌打をした）だから君たちは遊び女といわれるんだ」

「いやそうでないね。こう云い出したからには、こつちに相談に乗ろうという腹があるからだよ。食べる方は引受けるから、君、思う存分にやってみちやどうだね」

こうして、柚木は蒔田の店から、小そのが持つている家作の一つに移った。老妓は柚木のいうままに家の一部を工房に仕替え、多少の研究の機械類も買ってやった。

小さい時から苦学をしてやつと電気学校を卒業はしたが、目的のある柚木は、体を縛ら

れる勤人になるのは避けて、ほとんど日傭取り同様の臨時雇いになり、市中の電気器具店廻りをしていたが、ふと蒔田が同郷の中学の先輩で、その上世話好きの男なのに絆され、しばらくその店務を手伝うことになって住み込んだ。だが蒔田の家には子供が多いし、こまこました仕事は次から次とあるし、辟易していた矢先だったのですぐに老妓の後援を受け入れた。しかし、彼はたいして有難いとは思わなかった。散々あぶく銭を男たちから絞って、好き放題なことをした商売女が、年若い良心への償いのため、誰でもこんなことはしたいのだろう。こつちから恩恵を施してやるのだという太々しい考は持たないまでも、老妓の好意を負担には感じられなかった。生れて始めて、日々の糧の心配なく、専心に書物の中のことと、実験室の成績と突き合せながら、使える部分を自分の工夫の中へ鞅し取って、世の中にないものを創り出して行こうとする静かで足取りの確かな生活は幸福だった。柚木は自分ながら壮軀と思われる身体に、麻布のブルーズを着て、頭を鍔で縮らし、椅子に斜に倚つて、煙草を燻ゆらしている自分の姿を、柱かけの鏡の中に見て、前とは別人のように思い、また若き発明家に相応わしいものに自分ながら思った。工房の外は廻り縁になっていて、矩形の細長い庭には植木も少しはあった。彼は仕事に疲れると、この縁へ出て仰向けに寝転び、都会の少し淀んだ青空を眺めながら、いろいろの空想をまど

ろみの夢に移し入れた。

小そのは四五日目毎に見舞つて来た。ずらりと家の中を見廻して、暮しに不自由そうな部分を憶おぼえて置いて、あとで自宅のものおぼの誰かに運ばせた。

「あんたは若い人にしちや世話のかからない人だね。いつも家の中はきちんとしているし、よごれ物一つ溜ためてないね」

「そりやそうさ。母親が早く亡くなつちやつたから、あかんぼのうちからおむつ襁褓を自分で洗濯して、自分で当てがった」

老妓は「まさか」と笑つたが、悲しい顔付きになつて、こう云つた。

「でも、男があんまり細かいことに気をつくのは偉くなれない性分じやないのかい」

「僕だつて、根からこんな性分でもなさそうだが、自然と慣らされてしまつたのだね。ちつとでも自分にだらしがないとところが眼につくと、自分で不安なのだ」

「何だか知らないが、欲しいものがあつたら、遠慮なくいくらでもそうお云いよ」

初はつ午つまの日にはいなりずし稲荷鮎いなりずしなど取寄せて、母子のようなくつろ寛ぎ方くつろで食べたりした。

養女のみち子の方は気紛れであつた。来はじめると毎日のように来て、柚木を遊び相手にしようとした。小さい時分から情事を商品のように取扱いつけているこの社会に育て、

いくら養母が遮断しゃだんしたつもりでも、商品的の情事が心情に染しみないわけはなかった。早くからマせて仕舞って、しかも、それを形式だけに覚えてしまった。青春などは素通りしてしまつて、心はこどものまま固つて、その上皮にほんの一重大人の分別がついてしまつた。柚木は遊び事には気が乗らなかつた。興味が弾まないままみち子は来るのが途絶えて、久しくしてからまたのつそりと来る。自分の家で世話をしている人間に若い男が一人いる、遊びに行かなくちや損だといふくらいの気持ちだつた。老母が縁もゆかりもない人間を拾つて来て、不服らしいところもあつた。

みち子は柚木の膝の上へ無造作に腰をかけた。様式だけは完全な流ながしめ晒しめをして「どのくらい目方があるかを量つてみてよ」

柚木は二三度膝を上げ下げしたが

「結婚適齢期にしちやあ、情操のカンカンが足りないね」

「そんなことはなくつてよ、学校で操行点はAだつたわよ」

みち子は柚木という情操という言葉の意味をわざと違えて取つたのか、本当に取り違えたものか——

柚木は衣服の上から娘の体格を探つて行つた。それは栄養不良の子供が一人前の女の嬌き

態ようたい をする正体を発見したような、おかしみがあったので、彼はつい失笑した。

「ずいぶん失礼ね」

「どうせあなたは偉いのよ」みち子は怒って立上った。

「まあ、せいぜい運動でもして、おつかさん位な体格になるんだね」

みち子はそれ以後何故とも知らず、しきりに柚木に憎にくみを持った。

半年ほどの間、柚木の幸福感は続いた。しかし、それから先、彼は何となくぼんやりして来た。目的の発明が空想されているうちは、確に素晴らしく思ったが、実地に調べたり、研究する段になると、自分と同種の考案はすでにいくつも特許されていてたとえ自分の工夫の方がずっと進んでいるにしても、既許のものとの牴てい触しよくを避けるため、かなり模様を変えねばならなくなった。その上こういう発明器が果して社会に需要されるものやらどうかも疑われて来た。実際専門家から見ればいいもののだが、一向社会に行われない結構な発明があるかと思えば、ちよつとした思付きのもので、非常に当ることもある。発明にはスペキュレーションを伴うということも、柚木は兼ね兼ね承知していることではあつたが、その運びがこれほど思いどおり素直に行かないもののだとは、実際にやり出してはじ

めて痛感するのだった。

しかし、それよりも柚木にこの生活への熱意を失わしめた原因は、自分自身の気持ちに在った。前に人に使われて働いていた時分は、生活の心配を離れて、専心に工夫に没頭したら、さぞ快いだろうという、その憧憬から日々の雑役も忍べていたのだがその通りに朝夕を送れることになってみると、単調で苦澁なものだった。ときどきあまり静で、その上全く誰にも相談せず、自分一人だけの考を突き進めている状態は、何だか見当違いなことをしていたため、とんでもない方向へ外れていて、社会から自分一人が取り残されたのではないかという脅えさえ屢々起った。

金儲けということについても疑問が起った。この頃のように暮しに心配がなくなりほんの気晴らしに外へ出るにしても、映画を見て、酒場へ寄って、微酔を帯びて、円タクに乗って帰るぐらいのことで充分すむ。その上その位な費用なら、そう云えば老妓は快くくれた。そしてそれだけで自分の慰樂は充分満足だった。柚木は二三度職業仲間(きま)に誘われて、女道楽をしたこともあるが、売もの、買いもの以上に求める気は起らず、それより、早く気儘の出来る自分の家へ帰って、のびのびと自分の好みの床に寝たい気がしきりに起った。彼は遊びに行っても外泊は一度もしなかった。彼は寝具だけは身分不相応のものを作って

いて、羽根蒲団など、自分で鳥屋から羽根を買って来て器用に拵こしらえていた。

いくら探してみてもこれ以上の慾こほりが自分に起りそうもない、妙に中和されてしまった自分を発見して柚木は心寒こころぞくなった。

これは、自分等の年頃の青年にしては変態になつたのではないかしらんとも考えた。

それに引きかえ、あの老妓は何という女だろう。憂鬱ゆううつな顔をしながら、根に判たらない逞たくましいものがあつて、稽古きこごと一つだつて、次から次へと、未知のものを貪むさぼり食くつて行くうとしている。常に満足と不満が交かわる交かわる彼女を押し進すすめている。

小そのがまた見廻りに来たときに、柚木はこんなことから訊きく話を持ち出した。

「フランスレビユウの大立者の女優で、ミスタンゲットというのがあるがね」

「ああそんなら知つてるよ。レコードで……あの節廻せましはたいしたもんだね」

「あのお婆おばさんは体中の皺しわを足の裏へ、括くくつて溜ためめているという評判だが、あんたなんかまだその必要はなさそうだなあ」

老妓の眼はぎろりと光つたが、すぐ微笑して

「あたしかい、さあ、もうだいふ年越の豆の数も殖ふえたから、前のようには行くまいが、まあ試しに」といって、老妓は左の腕の袖口を捲まつて柚木の前に突き出した。

「あんたがだね。ここの腕の皮を親指と人差指で力一ぱい抓つかっておさえててご覧」

柚木はいう通りにしてみた。柚木にそうさせて置いてから、老妓はその反対側の腕の皮膚を自分の右の二本の指で抓つかって引くと、柚木の指に挟はさまっていた皮膚はじいわり滑り抜けて、もとの腕の形に納まるのである。もう一度柚木は力を籠こめて試してみたが、老妓にひかれると滑り去って抓り止めていられなかった。鰻うなぎの腹のような韌つよい滑かさど、羊皮紙のような神秘的な白い色とが、柚木の感覚にいつまでも残った。

「気持ちの悪い……。だが驚いたなあ」

老妓は腕に指痕の血の気がさしたのを、縮ちりめん緬じゆばんの襦こす袢すの袖で擦り散らしてから、腕を納めていった。

「小さいときから、打ったり叩たたかれたりして踊りで鍛えられたお蔭だよ」

だが、彼女はその幼年時代の苦勞を思い起して、暗澹あんたんとした顔つきになった。

「おまえさんは、この頃、どうかおしかえ」

と老妓はしばらく柚木をじろじろ見ながらいった。

「いいえさ、勉強しろとか、早く成功しろとか、そんなことをいうんじゃないよ。まあ、魚にしたら、いきが悪くなったように思えるんだが、どうかね。自分のことだけだつて考

え剩あまつてゐる筈の若い年頃の男が、年寄の女に向つて年齢のことを氣遣うのなども、もう皮肉に氣持ちがこずんで来た証拠だね」

柚木は洞察の鋭さに舌を巻きながら、正直に白状した。

「駄目だな、僕は、何も世の中にいる氣がなくなつたよ。いや、ひよつとしたら始めからない生れつきだつたかも知れない」

「そんなこともなからうが、しかし、もしそうだったら困つたものだね。君は見違えるほど体など肥つて来たようだがね」

事実、柚木はもとよりいい体格の青年が、ふーつと膨ふくれるように脂肪がついて、坊ちやんらしくなり、茶色の瞳の眼の上うわまぶた 瞼はの腫れ具合や、顎あごが二重に括くくびられて来たところに艶つやめいたいろさえつけていた。

「うん、体はとてもいい状態で、ただこうやつてゐるだけで、とろとろしたいいい氣持ちで、よつぽど氣を張り詰めていないと、氣にかけなくちやならないことも直ぐ忘れてゐるんだ。それだけ、また、ふだん、いつも不安なのだよ。生れてこんなこと始めてだ」

「麦とろの食べ過ぎかね」老妓は柚木がよく近所の麦飯ととろろを看板にしている店から、それを取寄せて食べるのを知つてゐるものだから、こうまぜつかえしたが、すぐ真面目に

なり「そんなときは、何でもいいから苦勞の種を見付けるんだね。苦勞もほどほどの分量にや持ち合せているもんだよ」

それから二三日経って、老妓は柚木を外出に誘った。連れにはみち子と老妓の家の抱えでない柚木の見知らぬ若い芸妓が二人いた。若い芸妓たちは、ちよつとした盛装をしていて、老妓に

「姐さん、今日はありがとう」と丁寧ていねいに礼を云った。

老妓は柚木に

「今日は君の退屈の慰勞会をするつもりで、これ等の芸妓たちにも、ちゃんと遠出の費用を払つてあるのだ」と云った。「だから、君は旦那になったつもりで、遠慮なく愉快をすればいい」

なるほど、二人の若い芸妓たちは、よく働いた。竹屋の渡しを渡船に乗るときには年下の方が柚木に「おにいさん、ちよつと手を取つて下さいな」と云った。そして船の中へ移るとき、わざとよろけて柚木の背を抱えるようにして掴つかまった。柚木の鼻に香油の匂いがして、胸の前に後襟えりの赤い裏から肥つた白い首がむつくり抜き出て、ぼんの窪くぼの髪の毛の生え際

が、青く霞めるところまで、突きつけたように見せた。顔は少し横向きになつていたので、厚く白粉おしろいをつけて、白いエナメルほど照りを持つ頬から中高の鼻が彫刻のようにはつきり見えた。

老妓は船の中の仕切りに腰かけていて、帯の間から煙草入れとライターを取出しかけながら

「いい景色だね」と云つた。

円タクに乗つたり、歩いたりして、一行は荒川放水路の水に近い初夏の景色を見て廻つた。工場が殖え、会社の社宅が建ち並んだが、むかしの鐘ヶ淵かねふちや、綾瀬あやせの面かげは石炭殻の地面の間に、ほんの切れ端になつてとどころに残つていた。綾瀬川の名物の合歡ねむの木は少しばかり残り、対岸の蘆洲あしずの上に船大工だけ今もいた。

「あたしが向島の寮に囲われていた時分、旦那がとても嫉妬家やきもちやきでね、この界限かいわいから外へは決して出してくれない。それであたしはこの辺を散歩すると云つて寮を出るし、男はまた鯉釣りに化けて、この土手下の合歡の並木の陰に船を繫もやつて、そこでいまいうランデブウをしたものさね」

夕方になつて合歡の花がつぼみかかり、船大工の槌つちの音がいつの間にか消えると、青白

い河靄もやがうつすり漂う。

「私たちは一度心中の相談をしたことがあったのさ。なにしろ舩ふなばた一つ跨またげば事が済むことなのだから、ちよつと危かつた」

「どうしてそれを思い止つたのか」と柚木はせまい船のなかをのしし歩きながら訊いた。「いつ死のうかと逢う度毎に相談しながら、のびのびになつているうちに、ある日川の向うに心中態ていの土左衛門が流れて来たのだよ。人だかりの間から熟々つくづく眺めて来て男は云つたのさ。心中つてものも、あれはざまの悪いものだ。やめようつて」

「あたしは死んでしまつたら、この男にはよかろうが、あとに残る旦那が可哀想だという気がして来てね。どんな身の毛のよだつような男にしろ、嫉妬やをあれほど妬やかれるとあとに心が残るものさ」

若い芸妓たちは「姐さんの時代ののんきな話を聴いていると、私たちきょう日の働き方が熟々つくづくがつがつにおもえて、いやんなつちやう」と云つた。

すると老妓は「いや、そうでないねえ」と手を振つた。「この頃はこの頃でいいところがあるよ。それにこの頃は何でも話が手取り早くて、まるで電気のようにでき、そしていろいろの手があつて面白いじゃないか」

そういう言葉に執成とりなされたあとで、年下の芸妓を主に年上の芸妓が介添しきになって、頻りに艶めなまかしく柚木を取持った。

みち子はというと何か非常に動揺させられているように見えた。

はじめは軽蔑けいべつした超然とした態度で、一人離れて、携帯のライカで景色など撮うっていたが、にわかには柚木に慣れ慣れしくして、柚木の歓心を得ることにかけて、芸妓たちに勝越こそうとする態度を露骨に見せたりした。

そういう場合、未成熟なまの娘の心身から、利かん気を僅かに絞り出す、病鶏のささ身ほどの肉感的な匂いが、柚木には妙に感覚にこたえて、思わず肺の底へ息を吸わした。だが、それは刹那せつな的のものだった。心に打ち込むものはなかった。

若い芸妓たちは、娘の挑戦を快くは思わなかったらしいが、大姐さんの養女のことではあり、自分達は職業的に来ているのだから、無理な骨折りを避けて、娘が努めるときは媚こびを差控え、娘の手が緩むと、またサービスする。みち子にはそれが自分の菓子の上にかる蠅はえのようにうるさかった。

何となくその不満の気持ちを晴らすらしく、みち子は老妓に当たったりした。

老妓はすべてを大して気にかけて、悠々と土手でカナリヤの餌えのはこべを摘んだり菖しょう

蒲園ふえんできぬかつぎを肴さかなにビールを飲んだりした。

夕暮になって、一行が水神すいじんの八百松へ晩餐ばんさんをとりに入ろうとすると、みち子は、柚木をじろりと眺めて

「あたし、和食のごはんたくさん、一人で家に帰る」と云い出した。芸妓たちが驚いて、では送ろうというと、老妓は笑つて

「自動車に乗せてやれば、何でもないよ」といつて通りがかりの車を呼び止めた。

自動車の後姿を見て老妓は云つた。

「あの子も、おつな真似をすることを、ちよんぼり覚えたね」

柚木にはだんだん老妓のすることが判らなくなった。むかしの男たちへの罪滅しのために若いものの世話でもして気を取直すつもりかと思つていたが、そうでもない。近頃この界限かいがいに噂が立ちかけて来た、老妓の若い燕つばめというそんな気配はもちろん、老妓は自分に對して現わさない。

何で一人前の男をこんな放胆な飼い方をするのだろう。柚木は近頃工房へは少しも入らず、発明の工夫も断念した形になっている。そして、そのことを老妓はとくに知っている

癖に、それに就いては一言も云わないだけに、いよいよパトロンの目的が疑われて来た。縁側に向いている硝子窓ガラスから、工房の中が見えるのを、なるべく眼を外らして、縁側に出て仰向けに寝転ぶ。夏近くなつて庭の古木は青葉を一せいにつけ、池を埋めた渚なぎさの残り石から、いちはずやつつじの花が虻あぶを呼んでいる。空は凝こもつて青く澄み、大陸のような雲が少し雨気で色を濁しながらゆるゆる移つて行く。隣の乾物ほしものの陰に桐の花が咲いている。柚木は過去にいろいろの家に仕事のために出入りして、醤油樽かびの黴臭い戸棚の隅に首を突込んで窮屈な仕事をしたことや、主婦や女中に昼の煮物を分けて貰つて弁当を使つたことや、その頃は嫌いやだつた事が今ではむしろなつかしく想い出される。蒔田の狭い二階で、注文先からの設計の予算表を造つていると、子供が代る代る来て、頸筋くびが赤く腫はれるほど取りついた。小さい口から嘗なめかけの飴玉あめを取出して、涎よだれの糸をひいたまま自分の口に押し込んだりした。

彼は自分は発明なんて大それたことより、普通の生活が欲しいのではないかと考え始めたりした。ふと、みち子のことが頭に上つた。老妓は高いところから何も知らない顔をして、鷹揚おうように見ているが、実は出来ることなら自分をみち子の婿むこにでもして、ゆくゆく老後の面倒でも見て貰おうとの腹であるのかも知れない。だがまたそうとばかり判断も仕切

れない。あの氣嵩きかさな老妓らうきがそんなしみつたれた計画けいかくで、ひとに好意こういをするのではないことも判る。

みち子を考える時、形式だけは十二分に整っていて、中身は実が入らずじまいになった娘、柚木はみなし茹ゆで栗の水つぽくぺちやぺちな中身を聯れん想そうして苦笑したが、この頃みち子が自分に憎にくみのようなものや、反感を持ちながら、妙に粘ねって来る態度が心にとま
つた。

彼女のこの頃の来方は氣紛れでなく、一日か二日置き位な定期的なものになった。

みち子は裏口から入って来た。彼女は茶の間の四畳半と工房が座敷の中に仕切こしらって拵こしらえである十二畳の客座敷との襖ふすまを開けると、その敷居の上に立った。片手を柱に凭もたせ体を少し捻ひねって嬌態を見せ、片手を拵ひねげた袖の下に入れて、写真とを撮るときのようなポーズを作つくった。俯うつむ向き加減かへんに眼を不機嫌らしく額越ぬかしに覗のぞかして

「あたし来てよ」と云った。

縁側に寝ている柚木はただ「うん」と云っただけだった。

みち子はもう一度同じことを云って見たが、同じような返事だったので、本当に腹を立て

「何て不精たらしい返事なんだろう、もう二度と来てやらないから」と云った。

「仕様のない我儘娘だな」と云つて、柚木は上体を起上らせつつ、足を胡座あぐらに組みながら

「ほほう、今日は日本髪か」とじろじろ眺めた。

「知らない」といつて、みち子はくるりと後向きになつて着物の背筋に拗すねた線を作った。柚木は、華やかな帯の結び目の上はすく、突襟つぎえりのうしろ口になり、頸の附根を真っ白く富士山形に覗かせて誇張した媚態びたいを示す物々しさに較べて、帯の下の腰つきから裾は、一本花のように急に削そげていて味もそつけない少女のままなのを異様に眺めながら、この娘が自分の妻になつて、何事も自分に気を許し、何事も自分に頼りながら、小うるさく世話を焼く間柄になつた場合を想像した。それでは自分の一生も案外小ぢんまりした平凡に規定されてしまう寂寞せきぼくの感じはあつたが、しかし、また何かそうなつてみての上のこと
でなければ判らない不明な珍らしい未来の想像が、現在の自分の心情を牽ひきつけた。

柚木は額を小さく見せるまでたわわに前髪や鬢びんを張り出した中に整い過ぎたほど型通りの美しい娘に化粧したみち子の小さい顔に、もつと自分を夢中にさせる魅力を見出したくなつた。

「もう一ぺんこっちを向いてご覧よ、とても似合うから」

みち子は右肩を一つ揺つたが、すぐくるりと向き直つて、ちよつと手を胸と鬢へやつて搔かいた。 「うるさいのね、さあ、これでいいの」彼女は柚木が本氣に自分を見入つてゐるのに満足しながら、薬玉くすだまの簪かんざしの垂れをピラピラさせて云つた。

「ご馳走を持つて来てやつたのよ。当ててご覧なさい」

柚木はこんな小娘なぶに黷なぶられる甘さが自分に見透かされたのかと、心外に思いながら

「当てるの面倒臭い。持つて来たのなら、早く出し給え」と云つた。

みち子は柚木の権柄けんべいづくにたちまち反抗心を起して「人が親切に持つて来てやつたのを、そんなに威張るのなら、もうやらないわよ」と横向きになつた。

「出せ」と云つて柚木は立上つた。彼は自分でも、自分が今、しかかる素振りに驚きつつ、彼は権威者のように「出せと云つたら、出さないか」と体を嵩張らせて、のそのそとみち子に向つて行つた。

自分の一生を小さい陥穽かんせいに嵌はめ込んでしまふ危険と、何か不明の牽引力の爲めに、危険と判り切つたものへ好んで身を挺ていして行く絶体絶命の気持ちとが、生れて始めての極度の緊張感を彼から抽ひき出した。自己嫌悪けんおに打負うたかされまいと思つて、彼の額あぶらから汗あせ

がたらたらと流れた。

みち子はその行動をまだ彼の冗談半分の権柄ずくの続きかと思つて、ふざけて軽蔑するやうに眺めていたが、だいぶ模様が違うので途中から急に恐ろしくなつた。

彼女はやや茶の間の方へ退りながら

「誰が出すもんか」と小さく呟いていたが、柚木が彼女の眼を火の出るやうに見詰めながら、徐々に懐中から一つずつ手を出して彼女の肩にかけると、恐怖のあまり「あつ」と二度ほど小さく叫び、彼女の何の修装もない生地顔が感情を露出して、眼鼻や口がばらばらに配置された。「出し給え」「早く出せ」その言葉の意味は空虚で、柚木の腕から太い戦慄が伝つて来た。柚木の大きい咽喉仏がゆっくり生唾を飲むのが感じられた。

彼女は眼を裂けるやうに見開いて「ご免なさい」と泣声になつて云つたが、柚木はまるで感電者のやうに、顔を痴呆にして、鈍く蒼ざめ、眼をもとのやうに据えたままだ戦慄だけをいよいよ激しく両手からみち子の体に伝えていた。

みち子はいよいよ何ものかを柚木から読み取つた。普段「男は案外臆病なものだ」と養母の言つた言葉がふと思ひ出された。

立派な一人前の男が、そんなことで臆病と戦つているのかと思うと、彼女は柚木が人の

よい大きい家畜のように可愛ゆく思えて来た。

彼女はばらばらになった顔の道具をたちまちまとめて、愛嬌したたるような媚びの笑顔に造り直した。

「ばか、そんなにしないでって、ご馳走あげるわよ」

柚木の額の汗を掌でしゅつと払い捨ててやり

「こつちにあるから、いらつしやいよ。さあね」

ふと鳴つて通つた庭樹の青嵐を振返つてから、柚木のがつしりした腕を把つた。

さみだれが煙るように降る夕方、老妓は傘をさして、玄関横の柴折戸しおりどから庭へ入つて来た。渋い座敷着を着て、座敷へ上つてから、褌つまを下ろして坐つた。

「お座敷の出がけだが、ちよつとあんたに云つとくことがあるので寄つたんだがね」

苩たばこい入れを出して、煙管きせるで煙草盆代りの西洋皿を引寄せて

「この頃、うちのみち子がしよつちゆう来るようだが、なに、それについて、とやかく云うんじゃないがね」

若い者同志のことだから、もしやということも彼女は云つた。

「そのもしやもだね」

本当に性が合つて、心の底から惚れ合うというのなら、それは自分も大賛成なのである。「けれども、もし、お互いが切れつぱしだけの惚れ合い方で、ただ何かの拍子で出来合うということでもあるなら、そんなことは世間にくらもあるし、つまらない。必ずしもみち子を相手取るにも当るまい。私自身も永い一生そんなことばかりで苦勞して来た。それなら何度やつても同じことなのだ」

仕事であれ、男女の間柄であれ、混り気のない没頭した一途な姿を見たいと思う。

私はそういうものを身近に見て、素直に死にたいと思う。

「何も急いだり、焦つたりすることはいらぬから、仕事なり恋なり、無駄をせず、一揆で心残りのものを射止めて欲しい」と云つた。

柚木は「そんな純粹なことは今どき出来もしなけりや、在るものでもない」と磊落に笑つた。老妓も笑つて

「いつの時代だつて、心懸けなきや滅多にないさ。だから、ゆっくり構えて、まあ、好きなら麦とろでも食べて、運の籤の性質をよく見定めなさいというのさ。幸い体がいいからね。根気も続きそうだな」

車が迎えに来て、老妓は出て行つた。

柚木はその晩ふらふらと旅に出た。

老妓の意志はかなり判つて来た。それは彼女に出来なかつたことを自分にさせようとしているのだ。しかし、彼女が彼女に出来なくて自分にさせようとしていることなどは、彼女として自分とて、またいかに運の籤のよきものを抽ひいた人間とて、現実では出来ない相談のものなのではあるまいか。現実というものは、切れ端は与えるが、全部はいつも眼の前にちらつかせて次々と人間を釣つて行くものではなからうか。

自分はいつでも、そのことについては諦あきらめることが出来る。しかし彼女は諦めということを知らない。その点彼女に不敏なところがあるようだ。だがある場合には不敏なもの方に強味がある。

たいへんな老女がいたものだ、と柚木は驚いた。何だか甲羅を経て化けかかっているようにも思われた。悲壮な感じにも衝うたれたが、また、自分が無謀なその企てに捲まき込まれる嫌な気持ちもあつた。出来ることなら老女が自分を乗せかけている果しも知らぬエスカラーターから免れて、つんもりした手製の羽根蒲団のような生活の中に潜もぐり込みたものだと思つた。彼はそういう考えを裁くために、東京から汽車で二時間ほどで行ける海岸の

旅館へ来た。そこは蒔田の兄が経営している旅館で、蒔田に頼まれて電気装置を見廻りに来てやったことがある。広い海を控え雲の往来の絶え間ない山があった。こういう自然の間に静思して考えを纏めようということなど、彼には今までについぞなかったことだ。

体のよいためか、ここへ来ると、新鮮な魚はうまく、潮を浴びることは快かった。しきりに哄笑が内部から湧き上つて来た。

第一にそういう無限な憧憬にひかれている老女がそれを意識しないで、刻々のちまぢました生活をしているのがおかしかった。それからある種の動物は、ただその周囲の地上に圈の筋をひかただけで、それを越し得ないというそのように、柚木はここへ来ても老妓の雰囲気から脱し得られない自分がおかしかった。その中に籠められていたときは重苦しく退屈だが、離れるとなると寂しくなる。それ故に、自然と探し出して貰いたい底心の上に、判り易い旅先を選んで脱走の形式を採っている自分の現状がおかしかった。

みち子との関係もおかしかった。何が何やら判らないで、一度稲妻のように掠れ合った。滞在一週間ほどすると、電気器具店の蒔田が、老妓から頼まれて、金を持って迎えに来た。蒔田は「面白くないこともあるだろう。早く収入の道を講じて独立するんだね」と云った。

柚木は連れられて帰った。しかし、彼はこの後、たびたび出奔癖がついた。

「おつかさんまた柚木さんが逃げ出してよ」

運動服を着た養女のみち子が、蔵の入口に立ってそう云った。自分の感情はそっちのけに、養母が動揺するのを気味よしとする皮肉なところがあつた。「ゆんべもおとといの晩も自分の家へ帰つて来ませんとさ」

新日本音楽の先生の帰つたあと、稽古場に行っている土蔵の中の畳敷の小ぢんまりした部屋になおひとり残つて、復習直しさらいをしていた老妓は、三味線をすぐ下に置くと、内心口惜くやしさが漲りみなぎかけるのを気にも見せず、けろりとした顔を養女に向けた。

「あの男。また、お決まりの癖が出たね」

長煙管ながぎせるで煙草を一ぷく喫すつて、左の手で袖口を掴つかみ展ひらき、着ている大島の男縞が似合なうか似合なわないか検ためしてみ様子をしたのち

「うつちやつてお置き、そうそうはこつちも甘くなつてはいられないんだから」

そして膝の灰をぼんぼんぼんと叩いて、楽譜をゆっくりしまいかけた。いきり立ちでもするかと思つた期待を外された養母の態度にみち子はつまらないという顔をして、ラケツ

トを持つて近所のコートへ出かけて行つた。すぐそのあとで老妓は電気器具屋に電話をかけ、いつもの通り蒔田に柚木の探索を依頼した。遠慮のない相手に向つて放つその声には自分が世話をしている青年の手前勝手を詰る激しい鋭さが、発声口から聴話器を握つて自分の手に伝わるまでに響いたが、彼女の心の中には不安な脅えがやや情緒的に醜酔して寂しさの微醺のようなものになつて、精神を活潑にしていた。電話器から離れると彼女は

「やつぱり若い者は元気があるね。そうなくちや」呟きながら眼がしらにちよつと袖口を当てた。彼女は柚木が逃げる度に、柚木に尊敬の念を持つて来た。だがまた彼女は、柚木がもし歸つて来なくなつたらと想像すると、毎度のことながら取り返しのつかない気がするのである。

真夏の頃、すでに某女に紹介して俳句を習つてゐる筈の老妓からこの物語の作者に珍らしく、和歌の添削の詠草が届いた。作者はそのとき偶然老妓が以前、和歌の指導の札に作者に拵えてくれた中庭の池の噴水を眺める縁側で食後の涼を納れていたので、そこで取次ぎから詠草を受取つて、池の水音を聴きながら、非常な好奇心をもつて久しぶりの老妓の詠草を調べてみた。その中に最近の老妓の心境が窺える一首があるので紹介する。もつと

も原作に多少の改削を加えたのは、師弟の作法というより、読む人への意味の疏通そつうをより良くするために外ならない。それは僅に修辞上の箇所にとどまって、内容は原作を傷けきずつないことを保証する。

年々にわが悲しみは深くして

いよよ華やぐいのちなりけり

青空文庫情報

底本：「老妓抄」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年4月30日発行

1968（昭和43）年3月20日17刷改版

1998（平成10）年1月15日52刷

入力：佐藤律子

校正：大野晋

1999年5月5日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老妓抄

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>